

エッセイ

先生の学問を回想して

尹光鳳

私は広島大学へ来てから七年になるが、崔先生はもう定年だという。歳月の早さを今更に感じる。いつか聞いたが早くにお父さんと死に別れて寂しさの中で育った幼い頃、泣き虫だったという。上の姉さんたちが 11 人いたのに次々亡くなり、ただ一人の姉と自分だけ生き残ったという。そのためか幼い頃は寂しさによく泣いたようだ。涙の種類も様々であるが、先生の涙には何か恨みを含んでいるのか、孤独感よりも駄々をこねて何か急き立てるやんちゃ涙だったようだ。何か駄々をこねるということは押し強いということだ。この固執は学者として必ず取り揃えなければならない徳目でもある。自分なりに定規を持って、どんな対象も眺める崇高な姿こそ、学者が持たなければならない高尚な美德だ。従ってこのような意味で先生は早くから学者的素質を持っていたのかもしれない。

私が先生の名を知るようになったのは 15 年程前で、正式な出会いは学会であった。それ以前から本を通してよく知っており、先生は私にとって学問の大先輩である。早くから本が刊行されていたため、はじめは先生の年齢はかなり上かなと思った。先生はもともとソウル大学校師範大学国語教育学科出身だ。それでも文化人類学に関心があったのか、学生時代には文化人類学の講義を良く聞いたという。その時会った人が、韓国文化人類学界に貢献をした任哲宰先生と韓国仮面劇で有名な李杜絃先生だ。学生時代、崔先生は先生らについて行った現場調査で多くの体験を得て、徐々に学者的気質を伸ばしていった。

大学を卒業して大学院に進学し、そこで書いた修士論文が『ソノリグッと巫歌(1965)』である。これは先生の故郷である楊州の牛遊びクッ(巫儀)について書いた巫俗関係論文である。その後、陸軍士官学校先生の時に書いた論文が『韓国巫俗の研究(1967)』である。このような一連の論文は、先生が後にこの方面の権威者になる一つの始発点だったことがわかる。幼い頃から

巫俗の環境の中で育った先生には、このようなテーマがもしかしたら運命的だったのかもしれない。先生の生まれた揚州はソウルの北にあるが、この地域は高麗時代から巫俗の中心地として目立った都市だ。ここから近いところにある開城の徳物山が巫堂の神山と呼ばれるが、もう一つの神山が柑岳山である。

先生はお母上からまさにこの山の精气に乗って生まれたそうだ。『新しく書く巫俗』によれば、先生は生まれた時から病弱で、神母を置かなければなかった。そのため巫堂を母親として命をながらえたという。先生のお母上は毎年、又は隔年で巫女達を呼んで、この山に登ってクツを行った。後に大学に入って上記の二人の先生に会い、そのうち李先生から崔先生が揚州出身なのを知って、巫俗を研究しないかという誘いを受けるようになった。それ以後、先生は巫俗中心に論文を発表されて、『韓国巫俗の社会人類学的研究(1985)』という博士論文を後にまとめる。

先生は30代に日本に留学をしたが、言わば70年代の留学生だ。この時代韓国留学生は数えるほどで、誰でも日本に来ることが出来るわけではなかった。今の留学生とはその事情が非常に違った時代であった。とにかくこれがもたになって先生の学問も変わったようだ。その後、日韓間の学問交流にも力を尽くした。そして先生は韓国語と日本語で民俗に関わる多くの論文を発表したが、このような成果が個人著書だけでも、1969年に刊行した『扶安東門内堂山(1969)』を始め、今年出版された『サハリン：流刑と棄民の地(2003)』までおよそ55冊にもなる。これは一人ではやり遂げたい仕事であることは勿論である。更にこの中には韓国巫俗について書いたものが多くある。

このような研究が土台になり、先生は韓国人の先祖崇拜と家族関係に焦点をあてた論文を発表された。特に日本に拠点を移した後、先生の視角は巫俗の領域を脱して、植民地時代の韓国人の状況に注目するようになった。その結果が最近サハリン同胞たちの生活を直接現場で体験して、彼らの生活を述べた『サハリン：流刑と棄民の地』である。

しかしこのように多い著書の中でも先生の代表的な業績はやはり『韓国巫俗の研究』だと言える。加えて筆者個人的に面白くて有益だったことが『韓国人の泣き(1994)¹』であった。なぜならこれは先生の人生と、目に見えな

い韓国人の恨が重なった研究として、先生を理解するために分かりやすい本だからだ。また『韓国巫俗の研究』を詳しく見ると、先生の研究姿勢と哲学をうかがい知ることができる。先生と一緒に調査する機会を持った人なら、誰もが感じることもある。それは誰も追いつきたい調査現場での勤勉性である。先生はひとつの場所から他の場所に移動する時、絶対に休むことがない。そしてその日調査したことは必ずその日に整理するのが先生の調査態度である。これは民俗の調査の基本で注意しなければならないことだが、誰もが出来ることではない。そのため調査を終えた後に、一番先に報告書を提出することが出来るのは先生なのだ。合同調査に行ったとき同僚の中に居眠りする人を良く見るようになる。しかし先生にはこのようなことを許さない。学問に専念する人なら誰もが真似ていい先生の長所だ。先生の労作である『韓国巫俗の研究』もまさにこのような過程で書かれたことは言うまでもない。

韓国の巫俗に対する研究は韓国人よりも外国人学者たちによって成り立った。これについては先生の恩師である任先生がよく述べられていた。21世紀初頭、西洋の宣教師、特にアメリカの宣教師たちの中で何人かの人が韓国の巫俗に関して多くの記録を残した。しかし韓国の識者、特に学者達はこれについて学問の世界へ引き込む眼がなかった。1930年代に、李能和、崔南善が関心を表明し、孫晋泰は学生でありながら巫歌採集に力を尽くした。李能和は彼が見聞した資料と知識そして文献に現れた巫俗的資料を広く渉猟して『朝鮮巫俗考』を刊行した。そして孫晋泰は彼が採集した巫歌を『朝鮮神歌遺編』に含んで出版し、同時に巫歌に関する論文を幾つか発表した。

また1930年代に入り、秋葉隆と赤松智城が現地調査を通じて多くの資料を収集し、巫歌までも文献化された。これらの結果が『朝鮮巫俗の研究』だ。また村山智順は官府の行政力を動員し、巫俗資料を全国で収集して『朝鮮の巫覡』を刊行した。

このように韓国の巫俗の研究は外国人によって端緒を開いたが、その資料を処理するには充分ではなかった。その理由は、言語の障壁が大きいため正しい分析ができず、朝鮮文化に対する理解不足ゆえであることが多かった。それは西洋人学者や日本人学者たちの場合と同様のことが言える。

ところで日本人学者たちは西洋人学者たちより現地調査を多く行い、降神

巫、世襲巫、巫病などの用語を作り上げるほどに韓国の巫堂の世界を深く考察した。このような執拗な研究は周知の通り日帝強占期、政府の政策の一環で植民地化に寄与するための試みだったのは言うまでもない。そのため彼らは韓国人の習性を徹底的に調査したのだ。

戦後、大学教育が活発になることと同時に自国文化に対する関心も高くなったが、巫俗もその中の一つであった。しかし 1950 年代までこの方面の研究はほとんど未開拓であった。まさしくこのような時期にソウル大学に進学した先生は上記の二人の師に会って、民俗学と人類学の分野に接するようになり、その中でも韓国文化の源流だといえる巫俗に関心を持つようになったのだ。

先生は国文学を専攻したため、社会人類学の知識と研究方法は独学であった。後に日本で博士課程に進み、人類学者、民俗学者と交流しながら、学術雑誌に多くの論文を発表し、社会人類学的知識を得るようになった。そして巫俗が持つ意義と機能そしてその特性を客観的に見る眼が生じるようになった。その結果が即ち『韓国巫俗の研究』だ。

この本は二部で成り立っているが、一部は巫堂たちの集団を主対象にして、社会人類学的分析を行い、二部は巫堂たちが行うクツを文化人類学ないし社会人類学的分析を試みている。

一部では巫堂たちのアイデンティティに主眼点を置いて、彼らがいかに集団を形成、維持してきたのかを考察し、さらには社会階層としての特徴、巫堂の社会的機能を考察している。このような研究方法は当時の民俗学と社会人類学では新しい試みだったといえる。

また二部ではクツの社会人類学研究として「クツと社会」において家祭を、そして「クツの機能と社会構造」で韓国巫堂の源流ともいえる「バリ公主神話」の分析と巫俗儀礼と象徴を、そして終わりに部落祭の構造及び機能について述べた。以上を見れば当時先生の関心がどこにあったのかが分かる。即ち巫俗を通して宗教民俗学と社会人類学の領域で新しい分析を試みようとしていたのだ。これは当時民俗学に新しい方法論を取り入れようとする学界の一般的な傾向とも一致する。過去には民俗学が史学の補助科学として劣等な位置にあった。そのためこのような面を脱皮するために多くの方法を試みた

のだ。

この研究は後に再び『新しく書いた韓国巫俗』に刊行されたが、序章で特に方法論と調査方法そして韓国巫俗研究において争点、そして問題設定を行い今までの研究結果を書き直した。

一方筆者が面白く読んだものが『韓国人の泣き』である。この本を見れば先生の幼いときの様子が浮かび上がる。どの国でも泣かない人はいないが、この方面に対する関心と本は多くない。そのような点から、韓国ではこの本が初めてであろう。先生はこの本で自分の成長と涙の関係を述べながら、動物と人間の「泣く」こととそれぞれの涙の種類を挙げて、平素、誰も深く考えない涙について知り、興味を加えるようにしてくれた。先述した通り、この本を見れば先生がどんな環境の中で育ち、なぜ涙と深いかわりがあるか理解するようになる。偶然の一致なのか分からないが、私自身も幼い時は別名が泣き虫だった。この話を聞いたら笑われるかもしれない。だがこれは嘘ではない。あまりに泣き虫なので父が私を窓の外に投げてしまったこともあったほどだ。このような過去を思う時、この本の内容は誰よりも理解が出来る。

先生は『韓国人の泣き』の中で、泣きの源から追求して、動物をはじめ昆虫、葬式と涙、結婚と泣き、卒業式の泣きなど、他の作品に現れた泣きの様子を挙げて、これを人類学と連繋して考察している。この本は読者にとって、泣きについて思い直す魅力がある。先生は人間の泣きを三つに分けて説明している。まず声だけを出す動物的な泣き、そして声を出さずに涙だけをだす泣き、さらにこれらを複合した泣きに分類する。先生はの中で後者が理想的な泣きに認識されている、と述べる。さらに悲しみの表現では涙だけ流す形、声を伴う泣きなどさまざまな形態を持っていて、それについて分析すると韓国人の心がよく見えるという。

先生は日本に拠点を移してから在外同胞に対する関心を持ったが、特に植民地時代の韓国人達の生活について興味をもった。そのテーマの一つがサハリン同胞である。このために先生は三度にわたってサハリンを訪問し、彼らと一緒に生活しながら観察した。その本が先述した『サハリン：流刑と棄民の地』である。高齢にもかかわらず寒さの中、熱心に調査したのだ。ま

だ報告書の段階であるため、これから本格的な分析が期待される。

また多くの著作のなかでは時には曲解を受けたりしたこともあるが、先生は黙々と自分の道を歩いている。

先生は仕事がなかったら病気になる人である。そしていろんな仕事が好き
な人である。これが先生の健康の秘訣かもしれない。これからもっと元気になっ
て、いい業績を残すようにお祈りしたい。先生長い間本当にお疲れ様で
した。

註

¹ 『韓国人の泣き』は1994年に韓国にて刊行されたもので、2003年に再構
成され、『哭きの文化人類学』として日本で出版されています。(編集部)